

知的障害をもった子どもの造形活動

榎原弘二郎*

附属特別支援学校の校長になって、今年で3年目を迎えている。現在、生徒数は、60名で、定員（小学部18名、中学部18名、高等部24名、計60名）通りである。着任当初、学校名は、養護学校だった。「学校教育法の一部を改正する法律」によって、今年度4月から、特別支援学校と名称を変えた。

着任した年の6月に、小学部1組の砂遊びの授業を見た。小学部は、複式学級になっており、1組が1-2学年、2組が3-4学年、3組が5-6学年の3クラス編成である。児童たちは、校庭の砂場に入ったものの、砂で遊ぶということができないようだった。教員が、水を持ってきて流してみたり、カップに砂を入れて、砂型をつくったりして見せるが、児童は、なかなか自分から砂に働きかけて、形作ろうとしなかった。私は、どうして彼らは、砂で遊べないのだろうかと思った。

その日、私は、小学部の児童が下校する姿を見ていた。児童たちは、タンポポの綿毛を吹いて飛ばしていた。昔からある子どもたちの遊びである。タンポポの綿毛に息を吹きかけ、綿毛が翔んでいく様子を見て楽しむのである。その姿を見ながら、子どもたちを知るためには、授業以外の時間や場所で、彼らがどのようにして楽しさや喜びを見いだしているかということを押えることが必要だと思った。

同じ6月に、小学部1組で、「絵の具で遊ぼう」の授業が行われた。いわゆる造形遊びの授業である。絵の具をローラーにつけて紙の上に転

がしたり、坂にした板の上に貼った紙に絵の具を垂らしたり、絵の具を塗ったボールを転がしたり、大きな刷毛で細長い紙の上に絵の具を塗ったり、おもちゃの自動車の車輪に絵の具をつけて走らせたり、いろいろなものを用いて、絵の具を紙の上につけていた。ある児童が、手に絵の具をつけて紙に押し当てていた。その時、その児童は、自分の手形を見て、更にまた空いているところに手形をつくった。ある児童は、紙の上におもちゃの自動車を走らせるが、その自動車が動く姿を見ていて、その車が通ったあとの絵の具の跡（形や色）を見ていない。

児童たちは、熱中して取り組むものの、ローラーとかおもちゃの自動車などの動いているものを見るが、それによってどのように絵の具がついたかという変化する様を見ることは、あまりなかった。児童たちは、時間とともに次第に心も解放されてきて、もう少しで、変化しているものに目が行くように思われた。しかし、そこで授業終了となってしまった。それでも、変化しているものに目を向けた児童は、6人クラスの内、2人いた。

ところで、附属特別支援学校では、児童生徒の学習活動の結果は、小学部では教室内の壁に貼り出され、中学部、高等部では、教室内とともに多く廊下にも貼り出されている。いろいろな体験や活動の内容や感想が、絵や作文に表現されている。

7月初旬に行った林間学校の思い出が、高等部の廊下に貼り出されていた。ある生徒（高等部1年生・男子）が、つぎのような作文を書いていた。

* 埼玉大学教育学部美術教育講座

「馬をはじめてのりました。馬の体があたたかかったです。馬のふんをそうじしました。」

この「馬の体があたたかかったです」が、その生徒の馬に乗った感覚を生き生きと伝えていると思った。

また、他の生徒が、「きれいな景色や動物や植物を大切にする」(女子)、「きれいなけしきや動物植物を大切にしました」(男子)と書いていた。この「景色を大切にする」という表現は、教員が伝えたのであろうが、とても良いと思う。花や木は、ものであるが、景色は、もののようでものでない。このもののようにものでない景色

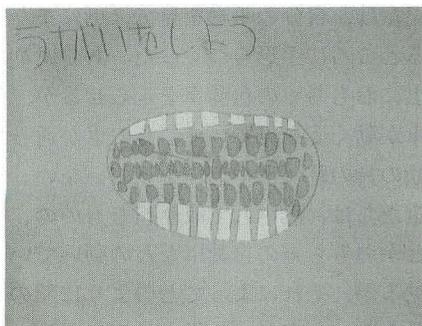


図1

(風景)は文化的な意味を含んでいる。風景を大切にすることは、自分の生活を大切にすることと同じ意味を持っている。

図1は、高等部の廊下に張り出されてあったもので、高等部2年の男子生徒が描いた絵である。この絵は、「うがいをしよう」という題のイラストレーションになっていて、「インフルエンザの予防には、次のことが大事です。まず手洗いとうがいを必ずし、ちゃんと食事をして栄養をとること。……」という文が付けられていた。この絵を見たとき、うがいをした時、口の中で水が踊っているようなそんな感覚が伝わってきた。

ものを自分自身の感覚でとらえ、それを表現するということの意義がここにある。その表現から、生徒がどのようにものに接し、どのように生活しているかが伝わってくる。

また、日曜日に家族参観が行われた時、ある自閉症の生徒(高等部3年・男子)は、その朝、日曜日なのに学校に行くということで不機嫌だったという。しかし、陶芸の作業に入ったら機嫌がよくなったという。恐らく、陶芸の作業で粘土を扱ううちに、次第に心が柔軟になってきたのだらうと思われる。その要因がどこにあるかは明瞭ではないが、私は、粘土という素材



図2

にあるのではないかと思った。

陶芸の授業は、作業の時間となっていて陶芸製品を作っている。美術の時間のように自由に粘土を形作る活動ではない。しかし、作業ではあっても、粘土を形通りにするという事は、粘土の形を確かめながら成型しなければならない。頭の中にある形にそって手を動かさなければならない。ここに、作業においても、生徒の創造的な面を見いだすことができる。このような創造的な活動が、生徒の心を柔軟にさせるのでないだろうか。粘土という素材が、心を柔軟にしてくれるのである。

図2は、ある児童（小学部2年・男子）が、休み時間に、教室の床に這いながら、おもちゃ

などを並べてつくり出していったものである。ちょっと見ると意味のないような空間であるが、よく見ると実に整然とならべられ、空間が秩序付けられている。ここに至るまでに、この児童は、何度も並べなおしている。

このような活動は、作品をつくろうとするものではなく、活動そのものが目的である。

休み時間中の児童の活動に、造形的、創造的要素が多く見られるが、これらの活動と授業の活動とが、結びついていくことが必要である。

(2007年9月28日提出)

(2007年10月19日受理)